

e-dream-s通信

e-dream-s ホームページ <http://www.e-dream-s.org>

教育用フォトアーカイブ @aglance <http://www.aglance.org>

No.32 発行：2003年 3月9日 特定非営利活動法人 イー・ドリームズ

3月号目次

- | | | | |
|----|------------------------------------|----------------|-----|
| 1 | この稚児、養ふ程に、すくすくと大きくなりまさる | 辻莊一 | p2 |
| 2 | 最近の読書から：思考のつまみ食い | 井川好二 | p3 |
| 3 | 今日は Special Day | 中川房代 | p7 |
| 4 | カメルーン教育事情（その2） | 山田昌子 | p9 |
| 5 | “チャータースクールツアー” 準備状況報告 | 中川房代 河合千恵 古谷恭子 | p13 |
| 6 | ECAP 韓国ツアー2003 途中経過報告 | 藤澤俊之 | p18 |
| 7 | アフカニスタン人の現地報告会に参加して | 山田昌子 | p20 |
| 8 | HYOGON コミュニケーション祭 2003 に参加して | 辰巳ゆきえ | p22 |
| 9 | @aglance 事業の現況報告 | 辻莊一 | p23 |
| 10 | @aglance 写真使用例の作成に再度ご協力を！目標 100 例！ | 道面和枝 | p23 |
| 11 | お知らせ | | p25 |



モンゴル・アルハンガイ県 花一面の谷(4)

ホジルトからオルホン河を渡ってアルハンガイ県に入ると、谷間は花と緑に被われ、遠くの山々が美しい。この谷では黄色のミヤマキンポウゲが一面に広がっていた。(2002.6...井村康雄)

モンゴル・アルハンガイ県

花一面の谷(4)

© e-dream-s

この稚児、養ふ程に、すくすくと大きくなりまさら¹

辻 莊一

こうして毎月よしなし事を書いているけれど、頭にあることをそのままキーボードを叩いて文章にしているわけでは、もちろんない。頭にあるのはまさに、よしなし事、頭にモヤモヤと浮かんでそのまま消えていく、なんだかよく分からないことであって、無理にでも形を与えてやらなければ跡形もなく消えてしまうものである。いや、書かなければという気持ちになって初めて何かもやもやと頭に浮かんでいることが、意識できるのである。それまでは存在しないと言っても良い。幸い、こうして書く場所と義務を与えられたので私の頭のもやもやは文章という形で、生まれ出てこの世にその愛しいような恥ずかしいような姿をさらしているわけである。

e-dream-s も元々は、何人かの頭の中にあるモヤモヤに過ぎなかったのである。おそらくはすぐに消えてしまったようなものである。それが、e-dream-s という名前を与えられて、お前にはこういうミッションがあると諭され、ついには大阪府から認証されて戸籍まで取得してしまったのである。生まれてみれば、なんと可愛らしい立派な子であることが。

さて、この e-dream-s 君はミッションがあるということは漠然とは分かっているが具体的に何をしたらいいかという、はっきりとは分からないのである。でも、格好いい名前もあるし何事かをなさなければ、この世に生まれ出てきた甲斐がない。生きていくためには自分で食い扶持を稼ぐ必要もある。じゃあ、なにをやるかという、やはり e-dream-s 君の頭の中でモヤモヤしているのである。

モヤモヤは飽くまでモヤモヤ。形を与えてやらなければ、ないのと同じである。そこで形になったのが、ECAP でありチャータースクールツアーであり@aglance である。これも、また生まれてみればなんと愛らしい。この子たちを立派に独り立ちさせなければという気持ちにさせる器量よしである。

e-dream-s にせよそこから生まれた事業にせよ、まだまだ将来は見えてこないのが実情だ。夢もあれば不安もある。しかし、単なるモヤモヤからこの世に生まれ出たことを思えば、そ

¹ 竹取物語

れは奇跡のようなものだ。生きていれば不安があるのは当たり前、立派に育てずにはおくものかという気持ちになるから不思議なものである。

e-dream-s.come.true

最近の読書から：思考のつまみ食い

井川 好二

三寒四温と云う通り、春の訪れと冬の名残りが交差する毎日。陽差しの暖かさに誘われ、風の冷たさに戸惑うが、そろそろ、重いコートを脱いで、歩きなれた靴を履き、ふらりと旅に出たくなる季節。

とは云え、諸般の事情で今すぐと云う訳にもいかず、ふつつつと澱に似たものが心の奥に溜まっていくのは毎年の倅い。それは、4月スタートで3月終了と云うこの国の学事暦や会計年度に長年慣れ親しんだ結果、3月の気候に身体も精神も無意識に反応し、夜明けの前に夢があるように、ある種の幕間が欲しいと思うからだろう。

仕事に縛られて身体がきかない時は、せめて、心の遊びを。それには、読書が最も手取り早い。頭の整理も序でにできるのが利点と云える。

最近読んだ本から、そうした心の遊び、思考の整理に役立ちそうな何冊かを選んで紹介する。と云っても、旅がフレンチのフルコースなら、読書はデパ地下のつまみ食い。腹一杯とはいかないが、餓えのしのぎにはなる。それに、言葉の刺激が舌に心地よいこともある。むろん、舌は脳に直結している。

(1) 柳宗悦 (1946/2000) 「手仕事の日本」東京：小学館

「民藝運動」の創始者として高名な柳宗悦²が、第2次大戦中に執筆し、戦後になって出版さ

²やなぎ むねよし【柳宗悦】民芸研究家・宗教哲学者。東京生れ。東大卒。雑誌「白樺」創刊に加わり、

れた本の復刻版である。日本の「手仕事」文化を、若い読者に紹介することが目的で書かれた「民藝」入門書。簡潔な文体で、地方毎に提灯だの篝だの紬だのが、イラスト入りで分かりやすく紹介されている。

元来わが国を「手の国」と呼んでもよいくらいだと思います。国民の手の器用さは誰も気付くところであります。

と云われると、なるほどと思うが、生来不器用な私としては、赤面の至り。しかし、「日本が素晴らしい手仕事の国である」と云うのが、柳の主張であり、その裏付けとして、実地に各地を廻り、当時（昭和 15 年頃）でも既に衰えつつあった郷土民具を紹介している。

佐渡小木の「船筆筥」だの、讃岐高松の「凧」だの、羽前庄内の「雪沓」だの、なかなか愉しい品々である。また、一概に民具なら何でも良いとは云わず、この地方のこれこれ、かつては立派な手仕事であったが、今は作られる数が多いが商業主義に流れ、見るべきものはない、などと切って捨てるところが良い。

と云っても、昭和 15 年の評価だから、平成の今、日本の各地方にどれほどその柳の云う「手仕事」文化が息づき、「実用の美」が残っているのやら、心もとない気にさせられる。日頃は、やたら情報機器に頼ったやっつけ仕事が多い私としては、たまには、こうした手間暇かけた「手仕事」の精神を見習うのが良いのだろう。

（ 2 ）村瀬千文（2000）「ホテル・ジャンキー」東京：三笠書房

自称「ホテル・ジャーナリスト」あるいは「ホテル・ジャンキー」である村瀬千文の、海外にある一流ホテルの実地見分エッセイである。取り上げられているのは、シンガポールの「ラッフルズ」、バンコクの「オリエンタル」、パリの「アマンダリ」など、一度は泊まってみたいと思うホテルばかり。ブランドに惑わされず、細かい点まで鋭いチェックが入っているのが頼もしい。

海外のホテルに投宿する場合、むろん、人種差別は避けて通れないし、言葉の問題もあるのだが、さまざまなエピソードを通して、ホテル業としてのサービスの質を解明しようとする村瀬の筆致は、「ホテル・ジャーナリスト」の自称に遜色と見せない。

ホテルが好きである。特に海外に行く時は、「ホテルをケチるとその国が嫌いになる」と云う中谷彰宏の仮説に賛同する私としては、ホテル選びに大いに参考になる一冊である。

紹介されてあるホテルで是非泊ってみたいと思わせるのは、ハンブルグの「フィア・ヤーレスツァイテン」。ペパーミント・グリーン美しい建物と目の前の人工湖の風景が、印象的である。こうした「美しいホテルに選ばれる客」になりたいと、日頃の無軌道ぶりを、些か反省するには良い本である。

村瀬のホテルのバスルームに関する論考を載せた HP³があって、

ホテルには人を幸せにする「ホテル力」があるが、なかでもバスルームが与える影響力はきわめて高い。パッとその空間に身を置いただけで、ふわっと天にも舞い上がるような幸せな気分になれるバスルームだってある。

など書いて、チェンマイの「リージェント・チェンマイ」やバリの「フォーシーズン・バリ・アット・ジンバラン・ベイ」のバスルームを紹介している。なるほどと思わせるのは、バスタブに浸かって昼寝をする場合、タオルを枕代わりにする方法で、これならと納得する。露天風呂の開放感も良いが、優雅なホテルのバスタブでゆったりもまた、心にも身体にも良いものである。

(3) 島尾敏雄(1992)「新編・琉球弧の視点から」東京：朝日文庫

以前に読んだ島尾⁴の随筆集を再読した。司馬遼太郎の「街道をゆく」シリーズ「沖縄・先島へのみち」で、那覇で、司馬が島尾に始めて会う場面があって、無口な島尾の言い分を確認したくての再読である。

両親が東北出身の島尾は、戦時中、「震洋艇」と呼ばれる、ベニヤ板を張って艇頭に爆薬をつけた特攻舟艇部隊の指揮官として、奄美大島の近くにある加計呂麻島⁵(かけろま)と云う島

³ http://www.homeclip.co.jp/hotel/hotel_top.htm

⁴ 小説家。横浜生れ。九大卒。自己の特攻隊体験や病妻の看病など、重い日常を幻想に託して描き、戦後派作家として私小説に新風を吹きこんだ。作「出孤島記」「死の棘」など。(1917～1986)[広辞苑第五版図版付き]

⁵ 鹿児島県奄美諸島の一。奄美大島の南西に幅 0.8～3 キロメートルの大島海峡を挟んで対する。面積 77 平

に赴任し、終戦を迎える。以降、奄美を中心に執筆活動を行なった異色の作家である。

日本を、本州島中心、つまり「ヤマト」中心に捉えるのではなく、千島列島から、日本列島、奄美、沖縄を含んだ琉球弧と云う、太平洋にビーズのように広がった地域と考え、その総体を「ヤポネシア」と呼び、「ヤマト」の相対化を図るのが、島尾の主張。司馬の云う「在日日本人」の考えとも、通じている。

地図を見ても、大陸を真中に置くから、日本はもう大陸に振り落とされまいと、はじっこの方にしがみついている形に見える。そういう視点からじゃなく、半分は太平洋に面しているんですから、そうした側から日本を見れば、メラネシアとか、ポリネシアみたいに、南太平洋のもう一つの島々のグループだというふうな気がするわけです。

またその琉球弧に言及して、

しかし私は、もしここをとりのぞけば、われわれの国の日本花綵列島は、そのささえを失って太平洋の広茫の中にそのやせて細長いからだをはげしくふり放され、ばらばらにちぎれて落ち、海のもくずとなってしまうのだと思えてならない。この島々があってはじめて、不安定な宙づりの姿勢ながらも大陸の東端にぶらさがりささえられていることができたのではないか。

なかでも、「請島の結婚式」「庭植のパパイヤ」などが、秀逸。(Saturday, March 8, 2003)



今日は special day

中川 房代

今日は3月8日。私にとっては、ちょっと特別な日。だから、少し個人的な話も含めて書こうと思う。

イー・ドリームズを設立してから3年が経つ。私も「副代表理事」を任せて頂いてから3年、恥ずかしながらやっと自分の仕事が見えてきた気がする。

そもそも何もない、何も知らないところからの出発。役職名は決めたが、何をするのが仕事なのか。私は、この3年間、“副代表理事って、私の仕事って何？”を常に自分に問い続けてきた。最近、NPO 学会もあるし、セミナーなどに行けば NPO の組織や運営はこうした方がいいですよ、というモデルも示してくれる。しかし、それぞれ団体の状況も実体も違う中では、そのまま借りてきてもうまく行くわけではない。自分たちで自分たちの実体やルールを作っていかなければ。それもまたおもしろいに違いない。

法人になったことで、社会的な責任も感じるようになった。事業の質は前提になるが、団体として品質や信頼をどう示していくのか、具体的には事務・財務、運営（マネジメント）をどうしていくのか。これは私にとっては未知の世界である。個人で勉強するにしても限りがあるのは目に見えている。

そんな思いもあって（に、個人的な動機も加わって）昨年7月から大阪 NPO センターの主催する「NPO 大学院講座」に入学し、その1期生となった。8ヶ月の講座修了後には、“NPO を起業し、運営できる人材を”というコンセプトで開講した学校である。1年間（実質は8か月）で一通りのことを学び、希望すれば2年間で「修士」取得をめざすカリキュラム編成となっているが、この学校は株式会社による運営なので（つまり学校法人の設置する大学院ではない）今はまだ正式な学位はとれない。が、構造改革特区の株式会社の学校経営を睨んでの設置という面白い成り立ちでもある。

今日は、午後からその1年目の修了式がある。

毎週土曜日の授業の中では、NPO や事業に関連して知っておくべき一通りの知識の講義、実際に活動している人を招いてのケーススタディ、グループでのプラン作成などの演習を行った。私にとっては今まで縁のなかった分野ばかり。法律・経済・経営・財務・事業立案などの世界に触れ、自分なりに興味を持ちおもしろさを感じることができたのも新たな発見だった。8 か月で合計 30 名もの講師の先生の授業があり、それぞれの分野の第一線で活躍されている方から直接お話を聞くことができたのも刺激的で、私もたくさんの元気と勇気をもたらした。

何よりも私にとって一番糧になったと思うのは、NPO の歴史的・社会的な役割を自覚できたことだと思う。簡単にいえば、「今の日本の社会を変えていくのは NPO の力である」ということで、自分のやっていることを今までより視界を広げて見るできるようになったことである。これが私の“元気の基”になっている。

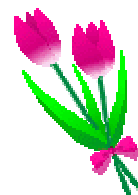
もう一つの興味は、この NPO 大学院の学校づくりである。株式会社の作る学校はどんな学校なのか、近隣の大学（院）に NPO コースが次々に設置されてきている中で、学位取得のできないこの学校の優位性や“売り”は何なのか、新規生をリクルートするにはどうすればいいのか、などという模索である。私たち受講生は経営側には立たないが、どうカリキュラム編成や学校運営に参画していくかについても少し話をしてきている。この NPO 大学院自身も、1 つの NPO の実験場である。

日産のカルロス・ゴーン社長は、成功の秘訣は“5%の計画、95%の行動”であると言ったそうである。多くのインプットを、どうアウトプットやアウトカムに結びつけていくのかは、NPO の分野に限らずどの分野においても難しい。でも、それをしようとするかどうか、全てを決定するのだろう。

私にとっては、これが1つの区切り。

明日からまた新たな1歩を踏み出していこう。設立4年目を迎えた e-dream-s と共に。

——では、行ってきま～す。何、着ていこうかなあ？



カメルーン教育事情(その2)

山田 昌子

先日、京都市教育委員会は「市立の中学・高校などの全英語教員を対象に、年間10日間の日本語禁止の英語集中研修を来年度から実施する」と発表した。さらに「英語学力共通試験のTOEFL受験も義務付け、550点を達成目標にする」とした。また「研修成果を英文レポートにまとめ、自分の授業風景を撮影した『授業実践ビデオ』の提出も義務付ける」そうだ。これは、昨年夏、文部科学省が「英語が使える日本人の育成のための戦略構想」を発表、英語教員の研修や採用の充実を教育委員会に求めたことを受けて、教員の意識改革を促したものだそうだ。(「京都新聞」2月11日より)この取り組みが、京都府や他の都道府県まで広がるかどうかはまだ定かではないが、日本の英語教育を何とかしなければという現実があることは確かだ。

カメルーンでも、教育を何とかしなければという現実がある。カメルーン人の友人からカメルーンの教育システムの概略を聞いていたとはいえ、中川副代表理事と私は、実際5つの学校(secondary schools)を訪問するまでよくわかっていなかった。まして英語教育がどのように実施されているなど見当もつかなかった。前回の「カメルーン教育事情」では、人口1,500万人中200万人が居住している英語圏であるリンベの学校 Government High School Limbeを紹介したので、今回は、フランス語圏の首都ヤウンデの学校を紹介したい。ヤウンデの街では、フランス語はよく耳にしたが、英語は全くといっていい位聞かなかったし、英語で話しかけてもまず通じなかった。今の世界で国が栄えていくためには、やはり英語は不可欠だろう。そのためにカメルーンはどのような施策をとっているのだろうか。まず(1部だが)現状をお伝えしたい。

Government High School Biyem-Assi は、ホームステイ先からほど近いところにあり、カメルーン全土を覆っている乾燥した赤い土の道を歩いていくとコンクリートブロックの塀が迎えてくれた。まず校長室に通された。校長先生は身体の大きな方で、笑顔で歓迎して下さったが、困ったことに彼の英語がフランス語に聞こえ、中川副代表理事も私も半分顔面蒼白になってしまった。が、こちらの言っている英語は理解してもらっているようなので、兎に角1つ1つ確認しながら会話を続けるしか仕方がないか・・・と考えていると、別室に案内された。会議室のような部屋には、日本でいう冬休み中にもかかわらず、英語科の先生5名(全

員女性)そして、生徒たち男女10数名が待っていてくれた。途中からピグミー族のキャンプ訪問に同行してくれたマナ先生(理科)も参加してくれた。彼らの英語はとてもわかりやすかったので、正直ホッとした。

「英語は、カメルーンでは外国語と同じなんです。」

と英語科の先生がおっしゃった時、私は妙に納得がいった。小学校入学までは local language のみで生活し、小学校7年間はフランス語で授業を受け、地域社会でも英語は必要ではないからだ。Government High School Biyem-Assi は主としてフランス語を使う学校であるため、英語の授業は1・2年では週5時間、3～7年では週3時間。6・7年の上級のクラスではこれに加え、数学の授業はフランス語と英語の2名の先生が教えている。だから、英語教育に物凄く力をいれているとは言い難い。

「生徒がなかなか英語が出来なくて、大変なんです。」

その先生は付け加えられた。それでも(動機付けができている優秀な生徒を集めたのだろうと容易に推察はできるものの)参加してくれた生徒たちは、私たちが話している英語を理解できたし、生徒たちへの質問にも物おじせずと答えてくれた。英語が外国語でありながら、このように公立の secondary school の生徒が外国人と英語できちんとコミュニケーションができること自体、驚きだった。先生方の英語もわかりやすく、また生徒たちの堂々とした姿勢に私は大いに興味を持った。どんなふうに教えているんだろう。何故この生徒たちは英語をこんなにも一生懸命にやろうとしているんだろう。聞きたいことが山のようにでてきた。

まず、先生方の英語の発音がとてもわかりやすいので、そのわけを尋ねてみた。英語教師になるには、大学では3年間、その後トレーニングスクールで2年間学ばなければいけない。大学の最初の2年間は英語とフランス語の2か国語による授業だが、3年になると最低6か月、最高9か月英国で学ばなければいけなかったそう(現在はこのシステムはないらしいが)。教師になると、毎月研修セミナーに参加し、英語教育の methods を学ぶ。毎水曜は午前だけの授業なので、この午後の研修セミナーへの参加率は100%。英語教師のグループや団体も出来ているようだ。

集まってくれた生徒たちに将来の夢を尋ねると、「医者になりたいんだ!」「科学の方面に進み、留学をしたい。それには英語が必要だよ!」「教師になって、カメルーンで英語がもっ

と使われるようにやってみたいんや！」・・・夢はさまざまだが、英語力をつけたいという生徒たちの熱意が伝わってきた。生徒にとって、大学入試や就職時フランス語と英語の両方が出来ることは大きな力となるし、特に医学や科学の分野に進みたい生徒にとって英語ができることは重要なことのようにだ。中には「日本で勉強してみたい」という生徒もいたが。英語の学習についての話になった。すると、

「授業で僕達が英語を話す時、先生が『センテンスで言え』って言わはるけど、それが間違いを恐れる原因になっていると思うんだ。」

ある生徒が言うと、蜂の巣をつついたように、6名の先生が一斉に声をあげた。

「それは違うでしょ。間違いを恐れるから上手く言えないんですよ。だいたいあなたたちは恐れ過ぎているのよ。授業だけじゃなく、日常生活でも英語を使う努力をしなくちゃいけないでしょ！」

カメルーンの先生は手厳しい。そんなふうには言わなくても・・・と思ったが、畳み掛けるように反論する先生たちは興味深かった。また、そう言われることがわかっていて、このような公の場で、しかも英語で、教師批判をする生徒たちも立派だ。彼らはそれだけ真剣だということだろうか。

< 「カメルーンの教育事情（その3）『英語教育編』」へつづく >

< 訂正 > 「e-dream-s 通信 No. 31」(2003年2月9日発行) p. 12 最後の行

誤： カソリックなど私立になると、3万 CFA フラン（6,000 円位）要るらしい。

正： カソリックなど私立になると、30万 CFA フラン（60,000 円位）要るらしい。

ちなみに Government High School Biyem-Assi では、制服や教科書なども含め 55,000 フラン/年（11,000 円）必要だという。

<写真>

(a) Government High School Biyem-Assi の先生方・生徒たちとのミーティング



(b)ミーティングでの Government High School Biyem-Assi の生徒たち



(c) Government High School Biyem-Assi のグラウンドでサッカーをする生徒たち



“チャータースクールツアー” 準備状況報告

中川 房代

チャータースクールツアーまで、あと約3週間となりました。訪米に向けて着々と準備が進んでいます。参加するのは、井川、辻、辻岡、塚本、河合、古谷、中川の7名です。今号では、河合さん、古谷さんのお二人から、参加にあたっての文章を寄せて頂きましたので、併せてお読みください。

日程

3月25日(火)朝 出国

午前中：ニューヨーク着、テンプル大学教育学部・EIRC(Educational Information & Resource Center)訪問

<ホテル泊>

3月26日(水) Community Academy of Philadelphia 訪問

<ホームステイ>

3月27日(木) Collegium Charter School 訪問	< ホームステイ >
3月28日(金) ニューヨークへ移動	< ホテル泊 >
3月29日(土) フィールドワーク・観光など	< ホテル泊 >
3月30日(日) ニューヨーク出発 —— 3月31日(月)夜 帰国	

ミニレッスン

ツアーではフィラデルフィアの2つのチャータースクールを訪問します。そのそれぞれで、参加者が日本紹介のミニレッスンをしていく計画をしています。全校生徒対象の授業とクラス対象の授業の2本立てです。現在、担当の学年も決定し、参加者それぞれがプランを練っているところです。3月16日の学習会で授業のアイデアを交流します。参加されない方もアイデアを出してくださいね。

ビデオレター

チャータースクールの教師、管理職、生徒、保護者にいろいろな質問をしてきます。それをインタビュー形式のビデオレターとして撮影し、帰国後皆さんに報告する計画です。どんなビデオになるか乞うご期待。3月15日までに聞いて欲しい質問事項をまとめて、中川までお寄せください。(できれば英語・日本語の両方で)

研修

3月16日にチャータースクールに関する第2回学習会をします。「お知らせ」を参照)それ以外にも、アメリカや日本の教育状況に関する英語版の学習資料を随時配信しています。参加者は日々研修に励んでいます。

顔写真

訪問先への参加者紹介の中に、文章に加えて顔写真を送る計画を進めています。デジカメで撮った写真をメールに添付して送るものです。学校訪問やホームステイ前に、事前に来る人の顔が分かっていると親近感も信頼感も増すのでは、という試みです。なかなかいいアイデアでしょ？

2つのチャータースクールは環境も生徒もかなり違う様子なので、全然違う経験ができそうです。日本の公立中学校に勤務する者として、日頃行き詰まりを感じている部分——個人に対応したカリキュラムや生徒指導の方法、保護者の学校へのボランティア参加義務など——、

日本にないシステムもたくさんあり、それらがどう機能しているのかこの目で見てきたいと思っています。日本でも限定的ではありますが、NPOの学校設置・運営が認められる方向にもなってきています。そんな将来の展望も見ることのできるツアーにしたいと思っています。

帰国後に、ツアー報告会を開催する予定です。では、頑張っ、楽しんで行ってきます！

この出会いの喜び

河合 千恵

多民族の増殖といわれるアメリカには、人種差別、少数民族の言語問題、ドラッグの蔓延、家庭の崩壊、学級経営の行き詰まりなど様々な問題に直面しています。このような環境のもとで、社会の担い手となる子ども達を心身ともに健やかに育てることは、親と教育者にとって最も大切な務めであることは言うまでもありません。わが国もまた、「豊かな社会」ゆえに起こった問題に苦悶しています。

すなわち、少子化が進み、過保護に育てられた子ども達は「個を尊重する」ということと「わがまま勝手をする」ということをはきちがえる傾向があります。また、社会的な関心の希薄さ、公共心の欠如、そして基礎学力の低下も目立ってきています。このような状況の中で、いかにして生徒ひとりひとりに備わった特性や美質を伸ばし、子どもがみずから進んで学び、学ぶ事に喜びを見出すように導くか。子どもと教育者が真の信頼関係を築き上げながら、ともに楽しく学ぶか。そして豊かな実りをともに喜ぶことができるようにするには、何を、いかにすべきか。このような問いに私達は応えて行かなければなりません。

このたび、アメリカで注目されているチャータースクールを視察することは私のかねてより熱望していたことでした。いま、この願いが叶えられることをありがたく、嬉しく思っています。特に、現地の教育者と両国の教育の状況や課題について意見を交換し、チャータースクールの教師宅でのホームステイを通して教育者同士の内面的な深い交流を行い、教育者としての研鑽を積むことは今、求められている企画だと思えます。

さらに、私たちは現地の生徒、教師を対象に日本紹介のミニレッスンの準備をして行くという課題を与えられました。私の担当はアメリカの小学5年生、中学2年生です。アメリカの10代の若者の心をとらえ、最後まで聴いてもらうにはどのようなトピック、発表方法を用いればよいか、どんな質問が出て来るだろうか、不安があります。しかし、この素晴らしい企画に参加できる喜びはたえようもありません。

そして、このような企画を立ててくださった方々に深く感謝しています。

皆様、はじめまして。(この e-dream-s 通信への寄稿依頼が私のもとにくるとは)

3月25日、ANA76便とANA10便が、何事もなく離陸する事を願っている今日この頃。今回のUS Charter School Tour 2003に参加する事になりました古谷と申します。(大阪YMCAで、井川先生の下で働いています。)

教師でもない私が、なぜこのツアーに興味を持ち参加を決めたのでしょうか。

「チャータースクール」との出会いは、ちょうど一年前の3月、アメリカ・ミネソタ州からジョー・ネイサン氏が来日し、YMCA 学院高等学校(天王寺)で講演を行なった時でした。ネイサン氏講演の通訳を井川先生がお受けになり、お手伝いをさせて頂いたのが、チャータースクールを知るきっかけでした。

独特な学校運営をとるチャータースクールを、知れば知るほど関心をもちましたが、それでも講演が終わった後、チャータースクールとの関わりは、特に何もなかったのです。通訳の仕事を終えた頃、井川先生は、それ程チャータースクールに興味をもたれていなかった様に感じていたのですが、昨秋ぐらいから、「チャータースクール」の言葉、それも訪問ツアーの企画が、私の耳にちらちら聞こえてきたのです。

フィラデルフィアのテンブル大学本校に行きたいと、常日頃思っていた私に、更にチャータースクールの現地訪問もあるという、このツアーが井川先生のもとで進められているのを知った時から、本当に、機嫌を伺っては、「連れて行って下さい」攻撃をしました。(井川先生。よくぞOKを出して下さいました。感謝です。)

ツアー参加が決まってから、アメリカに行くことを励みに、ルンルン気分で働いています。実際にチャータースクールを訪問するという事は、どんな旅行好きでもこのツアーでしか体験できない事ですよ。ガイドブック片手に、地元の交通機関をフルに活用して動き回り、現地の人と時々おしゃべりをする、これが私の旅のパターンなので、地元の学生としゃべろうなど、考えたこともなかったですね。アメリカの子供達が何を感じているのか、また日本の子供達との共通点や違いを見てもよ々と楽しみです(私の英語に付き合ってもらえるかが、問題ですが)。ホームステイも学生の時以来。もっぱら私はユースホステルを活用する貧乏旅行で、ステイ中は、友達作りに励んでいます。

さて、このツアーには一大イベントが。訪問先の2校、Community Academy of Philadelphia (CAP) と Collegium Charter School, West Chester (CCS)で、「日本紹介ミニレッスン」をするというのです。それも15分程の時間。大学の時に教育実習をした後は、教壇に立ったことがなく、この話を聞いた時には、正直こけてしまいました。日本のどのような事を、私が、教えられるかな、という事がそれから頭から離れなくなりました。

色々ネタを考えたあげく、『書道』にしようと、決めました。

最近アメリカでは、日本語や漢字が流行っていると聞いた事。同じ学年の日本の生徒が、どのような勉強をしているのかを知ってもらおうとの思い。そこから、私達も小学校高学年から書道を学んだように、“筆で字を書く”というあの独特の雰囲気、アメリカの子供達にも体験してもらおうという、日本紹介レッスンへと結び付いたのです。日本の子供達でも、続けている人も少ないでしょう。私も、中学校以来。頂いたお免除も、もう期限切れです。でも上手い下手ではなく、『筆で日本語を書けるんだ!』と、自慢してもらえるとうれしいですし、楽しんでもらいたいです。体験学習を通して、出会った子供達が、『絶対日本に行きたい』、『もっと日本を知りたい』と言ってもらいたいのです。(私の英語も、これなら持ち堪えられるはず。)

先日100円ショップで、筆、墨汁、文鎮(軽かったです)、墨、すずり(これはプラスチック、つまり墨汁入れですね)があるのをチェック。中川さんにも、譲って頂ける筆があるかを、職場で聞いて頂いているのです。

今は、どんな漢字を書いてもらおうか思案中。16日の最後の学習会で、プロの先生方の意見や模擬レッスンから、しっかりアイデアを仕入れたいところです。

訪米までは、食事の時も、歩いている時も、くつろいでいる時も、日本、日本の子供、という意識が頭を巡っている私です。外に出て改めて日本を知る、これが海外旅行の醍醐味ですよ。

このツアー参加を決めた他の2つの動機。

テンブル大学本校に行ける。(そこで、テンブルグッズを買う。フクロウコレクターの私は、テンブルのシンボルキャラクターでもある、OWLグッズに期待をしています。)また仕事中、学生さんとの話の中で、「本校では~でしたよ。」なんてお話が出来れば、かっこいいですよ。

テロ後の NY に行ける。グランドゼロの前で手を合わせたいのです。人が一瞬にして亡くなる悲しみを、阪神大震災を経験してから、世界中の事件に対しても感傷的になっているので。

3つの目的がかなうのも、もう2週間ほど。世界中が、事件やテロで危ない情勢にあると言われているこの時期ですが、テロ報復でアメリカがイラクへ砲撃を開始した日の、5時間ほど前に、イラク上空を飛ぶ機内にいた私ですので、大丈夫なはず。(運があると、ツアー参加者の方に思ってもらえれば、参加した甲斐もありますか?!)

ビデオ係を仰せつかっています。参加出来なかった先生方、楽しみにして下さいね。そして、一緒にツアーに同行して頂ける先生方、宜しくお願い致します。井川先生。これに懲りず、また、同行させて下さいませ。もちろん、ツアーで学んだ事は、仕事にも多いに活かしますので。

ECAP 韓国ツアー2003 途中経過報告

実行委員 藤澤 俊之

今回は、準備の進展状況と会員向け研修会の実施状況に分けて話をしたいと思います。

まず、プログラム実施のための準備状況ですが、いよいよ3月になり、韓国では新学期を迎えています。そこで、韓国のコンタクトパーソン、李先生の提案により、韓国ソウル市教育委員会への協力依頼文を、e-dream-s 韓国語版を作っていただいた張さんに、翻訳をしていただきました。これに、井川先生が、助成金申請のときに作られた事業概要の韓国語版、e-dream-s のパンフレット等を持って、私がこの4月当初に韓国に渡り、教育委員会等を回りたいと思っています。

今回、このことに関して新たな展開がありました。井川先生の知り合いの紹介と言うことで、金智賢(キムジヒョン)という大阪の阪南高校へ ALT として来られている先生の協力を得られることになりました。金さんは、釜山の出身で、この4月に3年間の ALT としての職務を

終えられ帰国されるということ、帰国後もいろいろな面で、御助言やお手伝いをしていただけのことになっています。

そこで早速、金さんが、大阪の韓国領事館の教育担当領事と知り合いということで、近々紹介していただけることになっています。協力の諒解が得られると、プログラム実施の大きな追い風となることは間違いなく、有意義な話し合いにしたいと思っています。話し合いの結果については、次回に報告できると思います。楽しみに待っててください。このように、金さんを紹介して頂けたり、領事館へも話ができるようになったり、プロジェクトが実り多きものになることを予感させるもで、実行委員としてもがんばっていきたいと思っています。

さて次は、昨年12月に実行委員の勤務校を中心に行った、生徒への日韓相互理解に関するアンケートの件です。これは、韓国での教材作成プロジェクトの中心資料になるもので、現在韓国でも一部を変更し、もう一人の韓国での協力者である、この冬合宿に来てくださった Young Hee さんの勤務校で、3クラス程度で実施してもらえることになっています。その結果は、Young Hee さんが英語に翻訳して、送ってくれることになっています。

最後に、事前研修会の実施状況です。

大阪では、2月15日(土)に第1回研修会を、井川顧問に講師をお願いして実施しました。内容は、課題図書を司馬遼太郎「街道をゆく(2): 韓のくに紀行」(朝日文庫)と定め、それに関するビデオを見たり、顧問の話を中心に、日本と韓国、朝鮮とのかかわりを学びました。ほぼ同じ内容で、広島支部でも実施したいとの要望があり、3月8日(土)に井川先生が広島を訪れてくださることになっています。

東京でも、すでにビデオをお渡しし、同じように課題図書を読み事前学習をすることになっており、3月29、30日に実施される合宿においては、韓国人の方を講師に招いて、学習会をすることが決定しています。

今後の予定ですが、大阪では、4月19日(土)(予定)に Young Hee 先生のお知り合いで、冬合宿のパーティーにも来てくださった、大阪の金剛学園で教えておられる、朴 圭相先生に講師をお願いし、日韓の歴史に関する人物や事件にスポットをあてて勉強したいと思っています。

いろいろな意味で、この春休みを境に動きが出てくると思います。皆さんにも、ホームステイ先紹介の依頼等もしたいと思っていますので、御協力よろしくお願いします。

アフガニスタン人の現地報告会に参加して

e-dream-s 理事 山田昌子

先日、"セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン"という NGO の「来日アフガニスタン人スタッフ緊急報告会(註1)」に出席しました。直接アフガニスタン人から現地の様子が聞いてみたかったからです。ビデオや写真も見てみたかったです。

"セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン"は、アフガニスタンのカブールやバーミヤンなどの地域で、教育を中心とした子どもたちへの支援活動をしているそうです。今回は、現地職員のアブドゥラ・ラヒム氏を招き、直に話を聞くことで、支援活動を押し進めようという意図で開かれました。私自身、NPO メンバーのひとりとして、他の団体がどのような活動をしているかを知ることもまた勉強になるかなとも思いました。また、アフガニスタン人の英語や、英語で報告をされる時ボランティアの通訳はどのようになされるのかにも興味がありました。

アブドゥラ氏は、頭にターバンを巻き、ライトブルーの綿の民族衣装の上に背広を着て登場されました。英語もそれ程速くも遅くもなく、比較的わかりやすく、終始穏やかな表情で話されました。個人的に声をかけさせていただいた時も、とてもフレンドリーに接してくださいました。

"セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン"は、子供たちを取り巻く現状を話して下さった後、アフガニスタンの復興支援のため主に以下のような活動を行っているとおっしゃいました。(1)内戦で壊された学校の修復や建設、(2)1,000万個以上ある地雷の回避教育、(3)就学年齢を過ぎた少女のための識字教育。アブドゥラ氏は国の復興に携わるエンジニアとして、この活動を熱心に話して下さいました。

アブドゥラ氏は、内戦中ハザラ族だという理由で多くの迫害(例:牢屋に入れられ電気ショックをかけられる等)を受け、何度もパキスタンやイランなどに逃れ難民として生活した経験があるそうです。ハザラ族は、イスラム教徒ですが、人口約40%のパシュトゥーン族や約25%のタジーク族とは異なり、シーア派であり、また、ジンギスカンの子孫と言われるモンゴル系であるので、アフガニスタン人とみなされなかったためだそうです。

"セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン"では、藤原紀香のアフガニスタン写真展を開催されていますが、e-dream-s のような NPO がアフガニスタンの現状を写真アーカイブで世界に知らせることもまた大切ではないかと言うと、「その通りだ」とおっしゃいました。

「子供たちへの支援はどのようにすべきなのか？」質問をすると、アブドゥラ氏は「家族が互いに助け合うことが習慣であり大切なので、子供に直接支援は出来ない。子供を守る最前線には親がいるので、親を援助することが子供の支援につながる」と話して下さいました。大変複雑であり、また、当たり前のことながら「現地を知らずにサポートは出来ない」という言葉を思い出しました。そして、"I hope to have peace in Afghanistan."というアブドゥラ氏の言葉が印象的でした。e-dream-s は何ができるのか、また私たちは何がしたいのか、もっともっと考えていきたいです！



註1： 中川副代表理事と共に NPO 大学で学んでいる、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン 国内事業部の渡辺さんの紹介でした。

HYOGONコミュニケーション祭2003に参加して

広報 辰己ゆきえ

先月16日、JR神戸駅前クリスタルタワーにて、ひょうご市民活動協議会が主催するNPO/NGO 広報コンテスト「HYOGON コミュニケーション祭2003」に参加しました。このコンテストは、市民活動団体の広報作品を部門別に品評するもので、イー・ドリームズとしては、パンフレット、会報（e-dream-s 通信）、ホームページ（@ag glance）の3部門に作品を応募しました。そのうちホームページ部門で第1次審査を突破、入選作品に選ばれ、当日の2次審査に進みました。各部門でそれぞれ2作品、計12作品が入選し、当日、メイン会場でそれぞれの団体の代表者による作品のプレゼンテーション、2次審査が行われました。1作品5分という限られた時間でしたが、辻代表による@ag glanceのプレゼンテーションでは“On Demand Japanese Photo Archives”の紹介も盛り込まれ、私たちの新しい取り組みも参加者に伝えることができました。惜しくもグランプリは逃したものの、見事、各部門1作品が選ばれる優秀賞に輝き、副賞は、ホームページ作成、インターネットサーバー利用1年間無料、回線、接続1年間無料の目録と、真珠のイヤリングでした。

当日来場する予定であった特別審査員の村上龍氏は急用でキューバを訪問中のため、残念ながらビデオでの登場で、市民活動団体（NPO/NGO）だからといって、会報等の誤植が許されるわけではない、「商業活動だという発想も大切」等、メッセージを伝えました。

メイン会場でプレゼンテーションや審査、フリートークが進む間、会場外のロビーでは各入選団体のPRブースが設置され、それぞれの団体が活動紹介、グッズの販売をしていました。

こういったコンテストへの応募や、市民活動団体の集まりでの出店、PRは地道な広報活動で、すぐに結果が得られるものではありませんが、ひとりでも多くの人に自分たちの活動を知ってもらうためには欠かせません。また今回のコンテストでは、私たちの作品が社会に対してのイー・ドリームズの活動PRとしての役割を大いに果たすであろうということが証明されたように思われます。自分たちの活動に自信を持って、これからも一層、地道な広報活動にも協力をお願いいたします。



@aglance 事業の現況報告

辻 莊一

2003年5月から@aglance は国内向けの海外写真部門と海外日本語学習者向けの日本写真部門の二本立てとなります。海外写真部門は画像の質と量をさらに高めることと、使用例の充実を進めています。日本写真部門は5月の正式スタートに向けて試験運転中です。

1 海外写真部門（3月7日現在）

- (a) 画像数 4037枚
掲載国数 45
- (b) 使用例 10 （[道面さんの記事](#)参照）

画像は土曜日を除いて毎日10枚ずつ、使用例は週に1例ずつ掲載

2 日本写真部門（5月から正式スタート）

- (a) デザインの大枠は完成
- (b) サンプル画像（50例）の掲載準備中
- (c) 限定公開して使い勝手、オンデマンドシステムのチェック中

@aglance 写真使用例の作成に、再度ご協力を！ 目標100例！

～ 使用例作成・収集チームより報告～

道面 和枝

3月末の使用例一挙掲載をめざして、みなさんに使用例の作成をお願いしています。

3月8日現在までに手元に集まったものは、

- ・中学校（教科書3社の1学期分） 30例
- ・高校 4例

届いたものからどんどん担当の方に送付しています。

近日中に中学約20例、高校から一人3例ずつ送られることを期待しております。
学年末の超多忙な中ですが、準備作業にかなり時間がかかりますので、3月末のアップめざして、早急に作成をお願いします！

1月より@aglanceに「今週の使用例」としてあがっているものが(3月末までの予定を入れて)14例です。合計して現在48例。100例めざして頑張りましょう！

今後の予定

1. 「今週の使用例」は、これからも毎週土曜日更新で続けていく。

(今回送られる使用例の中から選んで、4月～8月に毎週1例ずつ掲載する)

2. 中学校の教科書3社の使用例作成は、2学期・3学期も続けて行なう。

* 2学期の〆切(シラバス表と使用例): 8月上旬 8月末に一挙掲載

* 3学期の〆切(シラバス表と使用例): 12月上旬 12月末に一挙掲載

本年度終わりには、教科書3社について、年間シラバスと使用例が出そろふこととなります。

3. 高校についても、以下の3つのカテゴリで作成収集を続ける。

リーディングの題材(アテンションゲッターとして、発展として)

ライティングの題材

オーラル・コミュニケーションの題材

現在までに送られたものを見ると、@aglanceのサイトの良さを生かしたさまざまなアイデアがあります。

新学期から、この使用例一挙掲載を見て、いろいろな先生方が使用し、感想を報告しあったり、応用例を出し合ったりできるように、具体案を考えているところです。1つのアイデアがどんどん広がってみんなの共有財産になることを願っています。



-----お知らせ-----

小口債券購入のお礼

2月末まで募集していました小口債券の購入にご協力ありがとうございました。
19名の会員から合計320万円が集まりました。近日中に債券をお届けします。
これを資金として大切にに使わせて頂きます。ありがとうございました。

チャータースクールツアー第2回学習会のお知らせ

日時：3月16日(日) 10:00-12:00

場所：テンブル大学 JAPAN 大阪校（大阪 YMCA 会館）
8階 810教室

チャータースクールやアメリカの教育に関する質問集約：

質問は、相手により、

(ア) faculty (教員)宛 (イ) administration (管理職・経営者)宛
(ウ) students (生徒)宛 (エ) parents (親)宛 に分けてください。

集約期限：3月15日(土)(学習会前日)

送付先：メールで、中川まで

*できましたら、英語・日本語の両方をお願いします。

編集後記

@aglance の写真を使った授業例を考えています。すでに2例作成しました。まだ、実践をしていないものですが、作っているうちに、4月から授業をするのが楽しみになってきました。「一年の計は元旦にあり」とはいいですが、これという計画もたてなかった元旦を反省し、「一年の計は4月にあり」でいこうと思います。何か新しいことにチャレンジしたくなるのも、今のこの季節ならではの。まずは、ずっと欲しかった最新版プリンターを購入し、@aglance の写真を美しく印刷できるようにする計画です。

(田辺恵美)